

学校教育目標 「自ら学び、心豊かでたくましく、未来を切り拓く三谷っ子の育成」
 ・めざす子ども像 **みずから学び、自分の言葉で表現する子** **たくましい体を持つ子** **にっこに笑顔で、思いやりのある子** **こきょうを大切にする子**

評価の項目	今年度の重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	判定基準	備考	判定結果	成果と課題	対 策
①教育課程・学習指導	児童一人一人に基礎的基本的な知識と技能の習得を図り、根拠や筋道を明確にし、表現する力を育てる。	書く活動を各教科の授業に意図的に取り入れ、相手を意識して自分の考えを伝えたり、表現したりする力を高める。	教務主任	全学年を通して、学習に向かう意欲は高く、落ち着いて学習に取り組んでいる。しかし、条件にそって「書く」力に個人差が見られる。「書く」「話す・聞く」のスキルを高めながら、自分の思いを表現する力を育てていく必要がある。	【成果指標】 各教科の学習やはげみの時間の課題の中で、条件に沿って文章に表し、自分の考えやまとめた事柄を相手に伝えることができる。	自分の考えを条件に沿って文章に表し、相手に伝えることのできる児童の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	CDの場合は、個別の指導や補充学習を実施し、取り組みの内容を改善する。	学期末に児童・教職員を対象にアンケートを実施する。	B	各学年の発達段階を考慮し、全学年で書く活動を意図的に授業や行事のふり返りに取り入れ、書く力の育成を図ることができた。自分の考えを書く力には、まだまだ個人差が見られる。継続的な指導が必要である。	次年度も継続して短作文の演習や学習のふり返りに「書く」活動を取り入れる。また、スキルを高め、内容の充実を図るために補充の時間を設けて、個別の指導を行う。
	国語科を核として学び合い学習の充実を図り、児童が主体的・協動的に課題を解決する力を育成するために、組織的・継続的に教師の授業力向上に努める。	全学年研究授業を行うとともに、各教科の授業に、ねらいを明確にした学び合いの場を設定し、児童の思考をつなぐための教師の関わり方を工夫する。	研究主任	どの学年においても、ねらいを明確にした学び合いの場を意図的に設定した国語科の授業が実践できるようになってきたものの、学び合いにおける教師の関わり方や振り廻り、学習評価の工夫については課題がある。	【努力指標】 主体的・協動的に課題を解決する力の育成に向け、ねらいを明確にした学び合いの場を設定し、児童の思考をつなぐための教師の関わり方を工夫することができる。	児童の思考をつなぐための教師の関わり方を工夫し、学び合いを充実させることができた教員の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	CDの場合は、研究先進校の取り組みなどをもとに、指導法や取り組みの内容を改善する。	学期末に教職員を対象にアンケートを実施する。	A	教師のモデルや学習計画を提示するなど、全学年が学習の見通しを持たせた授業を実践することができた。また、児童の学び合い活動の充実を図り、言語活動交流会や学び合い公開等を通して、教師が学び合い、授業力向上に努めることができた。	今後もねらいを明確にした学び合いの充実を図っていく。そして、児童の思考をつなぎ広めるための関わり方の工夫について研究を深め、実践につなげていく。
	読書習慣を確立し、読書量の確保と読書内容の向上を図る。	「朝の読書」「読書ノート」を継続して取り組む。個人の力に応じた個別指導を行う。「おすすめの本カード」等の活動を通して、必読書「宝石シリーズ」の目標冊数達成をめざす。	図書館指導担当	「読書ノート」については、冊数やページ数があり進まない児童がいる。また、高学年になるほど「宝石シリーズ」の目標冊数の設定が難しい面があるが、達成までに届かない児童もいる。	【成果指標】 「読書ノート」に記録したり、「おすすめの本カード」等からヒントを得たりして、「宝石シリーズ」の学年の目標冊数を達成する。	「読書ノート」と「宝石シリーズ」が、学年の目標冊数を達成することができた児童の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	CDの場合は、取り組みの方法を再検討する。	毎月の読書ノートや宝石シリーズ達成表で進み具合をチェックし、全体や個別に働きかける。	A	読書ノートについては、1年間に低学年は100冊、高学年は5000ページの目標を設定した。宝石シリーズの目標は、学期毎に設定し、1、2、3学期とも90%以上の児童が達成することができた。	次年度は、読書内容の充実を図り、より高い目標設定を考えていく。
②生徒指導	縦割り活動を推進し、コミュニケーション力を中心としたよりよい人間関係を育成する。	集団登校や清掃、縦割り交流活動、児童集会、運動会等でねらいを明確にした縦割り活動を行う。	生徒指導主事 児童会担当	あいさつ運動や集団登校、縦割り活動等を通して、良好な人間関係が育まれている。縦割り活動だけでなく、休み時間など日頃から異学年と触れ合う機会も多い。	【成果指標】 学級の友達や他学年の友達と仲良く活動できた児童の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	CDの場合は、取り組みの内容を再検討する。	7・12月に児童を対象にアンケートを実施する。	A	あいさつや言葉遣いは、高学年を見習い、低学年もよくできている。また、少人数のよさを活かして協力し合い、高学年がリーダーシップを発揮してあいさつ運動や児童会集会、当番活動等に意図的に取り組むことができた。	今後も、良好な人間関係を築いていくために、ねらいを明確にした縦割り活動を継続していく。また、様々な学校行事のねらいにも生徒指導の3機能を位置付けていく。	
	全教育活動活動において生徒指導の3機能を活かす。	学級づくり・授業づくり・学校行事等で、ねらいに、生徒指導の3機能を明記し、実践に活かす。少人数の学級づくりについて研修会を開催し、実践に活かす。	生徒指導主事	複式学級や少人数学級のため人間関係が固定しがちである。自己決定、自己存在感、共感的人間関係の面で、指導が必要な場面が見られる。	【努力指標】 学級づくり・授業づくり・学校行事等で生徒指導の3機能のねらいを位置付け、意識して取り組むことができる。	生徒指導の3機能のねらいを意識した取り組みができた教員の割合が、 A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	CDの場合は、取り組みの内容を再検討する。	7・12月に教職員を対象にアンケートを実施する。	A	学級づくりと授業づくりでは、生徒指導の3機能をその土台としてねらいに位置付け、ふり返りを行いながら取り組んできた。全教職員で共通理解を図り、各行事のねらいにも3機能を位置付けて取り組むことができた。	学級づくり、授業づくり、縦割り交流活動、他学年と交流する授業、また、行事等を通して、自己決定、自己存在感、共感的人間関係を育てていく。
③進路指導・キャリア教育	ゲストティーチャーから地域のよさを学び、将来の夢や目標、よりよい生き方をめざす気持ちを高めようとする心を育てる。	全学年において、地域の「ひと・もの・こと」を題材にしたふるさとのよさを学ぶ学習を取り入れる。	キャリア教育推進教師	児童アンケートからは、「地域のことがとても好き」と回答した児童が90%を超えている。豊富な地域の人材を活用し、生き方を学ぶことを通じて、より一層目標に向かって自己を高めようとする気持ちを育てたい。	【努力指標】 様々な教育活動の場に、計画的に地域の方をゲストティーチャーとして招き、授業をすることができる。	ゲストティーチャーを招き、地域のよさを学ぶ授業が A 年間を通して4回以上 B 年間を通して3回 C 年間を通して2回 D 年間を通して1回	CDの場合は、取り組みの内容を再検討する。	学期末に教職員を対象にアンケートを実施する。	B	456年生「里山教室」、3年生「まちの達人」、12年生の生活科の学習を中心に、地域の方をゲストティーチャーとして迎え、地域のよさを知らせることができた。話を聞いたり、体験したりすることから、職業観や生き方を学ぶ場面をたくさん設定することができた。	ゲストティーチャーを招いて計画的に授業が実施できるように各学年の単元計画や年間指導計画を確かめ実践する。さらにゲストティーチャーの一覧を次年度活用できるようにする。
④安全管理	危機管理意識を高め、防災教育の充実を図り、安心・安全な学校づくりをする。	避難訓練だけでなく、災害や不審者から身を守るための教職員の研修会を開催する。	教 頭	年3回実施した避難訓練では教師の指示に従い「おはしも」を守って迅速に避難できた。災害時や不審者に出くわした時、自分の力で自分の身を守ることができるような児童に育てたい。	【努力指標】 教職員を対象にした防災・防犯に関する研修会を実施し、教職員の危機管理意識を高めることができる。	教職員対象の防犯・防災に関する研修会を通じて危機管理意識が高まった教職員の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	CDの場合は、取り組みの内容を再検討する。	学期末に教職員を対象にアンケートを実施する。	A	児童対象の避難訓練では、いろいろな場面を想定して実施することができた。引き渡し訓練も想定を変えて行うことができた。また教職員対象の不審者に対する研修会やAEDの講習会など実施することができた。	事故や自然災害など想定外の事態に備え、さらに研修や訓練を行っていく。また、地域防災と連携した防災教育を推進していく。
⑤保健管理	児童の健康増進に向けた運動の習慣化を図り、バランスの良い体力の向上を目指す。特に柔軟性の向上を図る。	体育科の体づくり運動やスポチャレ、体育的行事を通して、児童の運動機会を確保し、体力の向上を図る。	体育担当	休み時間には体を動かして遊ぶ児童が多く、運動が習慣化している児童が多い。改善はされてきてはいるが、全体的に長座体前屈に見られる柔軟性が劣っており、体力のバランスが悪い傾向にある。	【成果指標】 年間2回体力テストを実施し、2回目の体力テストにおいて、各体力要素48項目中38項目(8割)以上H27年度の県平均記録の突破を目指す。	10月の体力テストにおいて、各体力要素全48項目中、H27年度県平均記録を突破した項目の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	CDの場合は、取り組みの内容を再検討する。	5月と10月に体力テストを実施する。	A	県平均を突破した割合は80%だった。10月の体力テストの結果は、5月に比べて大きく上回った。柔軟性は県平均を上回っていない学年もあるので、体育科の授業の導入で柔軟性を高める運動を意識的に取り入れていく必要がある。	年間を通して、体育科の授業において体力づくりに励む機会を設けていく。特に、全校で柔軟性の向上を目指す運動に取り組むと共に、学年の実態に応じた指導方法を工夫していく。
	心身の健康に関心をもち、自己管理能力を高める。特に正しいメディアとの付き合い方を知り、規則正しい生活習慣の定着を図る。	健康生活チェック等で児童の実態を把握し、生活習慣の定着を図る。また学校保健委員会ではメディアと視力の関係などについて学習する。	養護教諭	春の視力検査の結果、視力が0.9以下の児童の割合が3割近くいた。さらにその中の半数以上が昨年度よりも視力が下がっていた。また、昨年度のアンケートから、1日3時間以上テレビやゲームを使用するという児童の割合が増えている。	【成果指標】 児童がノーメディアデー等の取り組みを通して、規則正しい生活習慣が身につく、自己管理能力を高めることができる。	ノーメディアデー等を実施し、規則正しい生活習慣が身についた児童の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	CDの場合は、取り組みの内容を再検討する。	7月・11月に児童アンケートを実施する。	A	2学期までの健康生活チェックの集計の結果『朝ご飯』の項目はほぼ100%であった。『睡眠』の項目では1学期から2学期にかけてわずかに改善がみられた。今後も担任と連携し、次学年にむけて生活習慣の指導をつづけ、児童の自己管理能力を高めていく。	健康生活チェックを集計し、児童の実態を把握する。メディアとの付き合い方も含め、基本的な生活習慣の定着に向けて、テーマを決めて取り組んでいく。
⑥特別支援教育	特別支援教育の研修を深め、児童の特性理解と指導法の工夫、改善に努めるとともに、校内支援の定着と継続を図る。	計画的に他機関や保護者との連携を図り、個に応じた支援を継続するために、校内委員会や研修を行う。	特別支援教育コーディネーター	校内委員会を中心に全教職員で研修会を行い、児童理解や指導法の工夫、個別の支援について共通理解を図っている。気になる児童の継続した支援体制の構築に向け、取り組みを進めている。	【努力指標】 個に応じた支援の実態を定期的に記録にとり、児童理解と継続した支援の充実にも努めることができる。	児童理解、個に応じた指導支援を工夫し、継続した支援に努めた教員の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	CDの場合は、取り組みの内容を再検討する。	学期末に教職員を対象にアンケートを実施する。	A	校内委員会全体会や専門相談員派遣で学習したことを研修し、教職員の共通理解のもと、全児童に関わりながらきめ細かな指導ができた。一人一人の学習や生活の様子をみとり、工夫して指導を行うことができた。	全教職員で共通理解し、気になる児童への対応にあたる。次年度への引き継ぎを丁寧に行い、継続した指導ができるようにする。
⑦組織運営	組織的な学校運営に努め、学校評価を機能させ改善に活用する。	学校評価の年間計画に基づきPDCAサイクルで常に改善に活用する。	教 頭	各学期末にアンケート調査を実施して学校評価に活用している。学校評価の結果をPDCAサイクルを通じて、改善すべき点を明確にし、共通理解しながら実践している。	【努力指標】 学校評価の年間計画に基づき、PDCAサイクルを踏まえ、常に改善に努める。その中で共通理解・共通実践を図りながら組織的・効率的な学校運営に努める。	組織的、効率的な学校運営に努めることができたと感じる教職員の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	CDの場合は、取り組みの内容を再検討する。	学期末に教職員を対象にアンケートを実施する。	A	どの分掌も学校ビジョンを受けて組織的に取り組んでいる。組織的、効率的な学校運営に努めることができたと感じる教職員がほとんどである。	今後も効率よく仕事ができるように、会議の内容の見直しや各分掌のファイルの整理や文書の管理を行い事務処理などの短縮を図っていく。
⑧研修	複式授業や特別支援教育の研修を深め、指導法の工夫を図る。	計画的に研修会を設定し、先進校の実践や専門相談員に学び、児童や学級の実態に応じたきめ細やかな指導をする。	教 頭	今年度より算数科において「わたり、ずらし」を含む複式授業を実施している。複式授業のみならず、特別支援教育においても先進校の実践に学びながら、児童や学級の実態に応じたきめ細やかな指導を実践できるよう取り組みを進めている。	【努力指標】 複式授業や特別支援についての研修会を通じて学んだことが教員の指導力向上に活かされている。	研修会で学んだことが教員の指導力向上につながったと感じる教員の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	CDの場合は、取り組みの内容を再検討する。	学期末に教職員を対象にアンケートを実施する。	A	夏季休業中や職員朝礼時を利用して研修内容についての報告会を行ったり、資料を回覧したりするなどして、研修で学んできた内容などを還元して、教員全体の指導力向上に役立っている。	今後は新教育課程の移行期に入るので、これまでの方策だけでなく、研修で学んだことを還元する場を計画的に設定していく。
⑨保護者、地域との連携	保護者や地域に教育活動を公開するとともに、情報を共有し連携を図る。	フリー参観や授業参観、学校だよりや学級だより、HPなどを活用して学校の様子を知らせる。	教 頭	学校だよりや学級だより、HP等を活用して学校の様子を家庭・地域に発信している。また参観日等の出席率は非常に高く、青少年活動に対しても協力的な保護者が多い。	【満足指標】 HPや学校だよりなどを通じて教育活動を公開することにより、保護者や地域の人々がその内容を知っている。	HPや学校だより、学級だよりなどを通じて教育活動の内容を知っていると答えた保護者の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	CDの場合は、取り組みの内容を再検討する。	7・12月の保護者アンケートで調査する。	A	保護者アンケートでは9割を超える保護者が学校の様子が良く分かると答えている。	今後も保護者、地域との連携を図っていく。そのためにできる範囲内で学校だより、学級だより、HPを通じて情報を発信していく。
⑩教育環境整備	校舎の環境整備に努め、安全安心な学習環境の充実を図る。	効果的な掲示や、安全で教育効果を高める環境を整備する。	教 頭	計画的な安全点検を実施し、校舎内外の環境整備に努めている。学校全体の環境整備については育友会や、教育後援会、同窓会などと連携して整備に当たっていく。	【満足指標】 安全点検を実施し、安全で効果的な校内外の環境整備となるよう努める。	安全で効果的な学習環境の整備に努めることができたと感じる教職員の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	CDの場合は、取り組みの内容を再検討する。	学期末に教職員を対象にアンケートを実施する。	A	不具合はすぐに修繕し、安全で効果的な環境整備に努めてきた。一方、猪の被害や木の剪定など学校だけでは対応できないこともある。	毎月の安全点検を徹底し、今後も学習環境づくりに努めていく。校地の環境整備などは育友会や後援会、まちづくり推進協議会と連携し、整備にあたっていく。

学校関係者評価
 ・アクティブラーニングと学び合いとの関連について、アクティブラーニングはモデル校を参考にしながら、学び合う場面を作り、複式の中で進めていく。
 ・本校の国語科研究は長年の積み重ねがあり、現在は全校で系統的に言語活動に取り組む中で、成果を上げている。今後も継続して特色ある学校づくりに努めてほしい。
 ・国語の力も大切だが、理数の力を伸ばすことも大切である。子ども達に考える習慣がつくようにしてほしい。